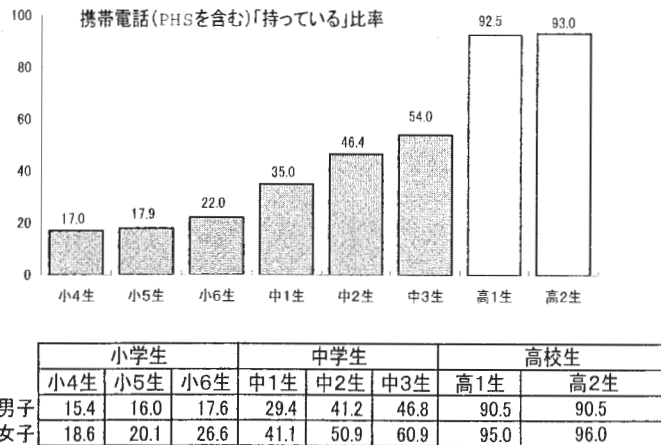


最後に携帯電話の所有状況のみてみたい。所有と使用は必ずしも一致するわけではない。だが、携帯はパーソナルな機器なので家族共用ということは難しく、とりわけ子どもの場合、親が購入するかどうかで使用状況が左右されるといえる。ここでは、所有のみてみる。



【図表 4 携帯電話の所有】

図表 4にあるように、学校段階によって携帯の所有は大きく異なる。高校生は、約 9割が所有している。女子に所有率がやや高い。中学生は、学年の上昇につれて所有率が上がる傾向がある。通塾や部活動など行動範囲の拡大が影響するのか、中学 3年生になると半数を超える。中学生でも、女子が全体に高い割合を示す。小学生は所有率が全体に 2割前後で、ここでも小学 6年生の女子が最も高い割合を占めず。

このように、携帯電話は、パソコンと異なり、性・学校段階に応じた「限定的メディア」であるといえる。いいかえれば、女子に親和的で、学校段階に伴う社会関係の広がりに影響を受けるといえよう。さらに、詳述はしないが、大都市部での形態の所有率は郡部を大幅に上回っており、地域性による使用・所有状況の差もある。

では、こうしたユーザーはいかなる利用方法で携帯を使用しているのか。後述する。

6. パソコン使用者の特質

4つのメディアを比較してみると、テレビのように誰もが利用するメディアもある反面、小学生男子のよく使用するテレビゲーム、高校生女子が最も所有する携帯電話というように、属性に依拠

したメディアもある。しかしながら、パソコンの家庭利用は、それとは別な条件で限定されるとみられる。結論を先取りすれば、成績の自己評価あるいは偏差値層によって、パソコンの使用・所有がかなり異なってくるといえよう。

学校種別		使用頻度					合計
		週に5日以上	週に3~4日	週に1~2日	ほとんど使わない	家にはない	
小学校	下	109 8.7%	112 8.9%	240 19.1%	393 31.2%	370 29.4%	1259 100.0%
	中	107 8.0%	157 11.7%	301 22.4%	461 34.3%	288 21.4%	1344 100.0%
	上	133 10.6%	156 12.4%	341 27.1%	395 31.4%	213 16.9%	1257 100.0%
	合計	392 9.2%	467 11.0%	956 22.5%	1377 32.5%	928 21.9%	4240 100.0%
中学校	下	221 15.7%	148 10.5%	209 14.8%	448 31.7%	326 23.1%	1412 100.0%
	中	270 18.2%	185 12.5%	330 22.2%	465 31.3%	208 14.0%	1485 100.0%
	上	285 18.0%	224 14.2%	359 22.7%	530 33.5%	165 10.4%	1581 100.0%
	合計	786 17.3%	561 12.3%	912 20.0%	1463 32.2%	718 15.8%	4550 100.0%

【図表 5 成績自己評価別のパソコン使用】

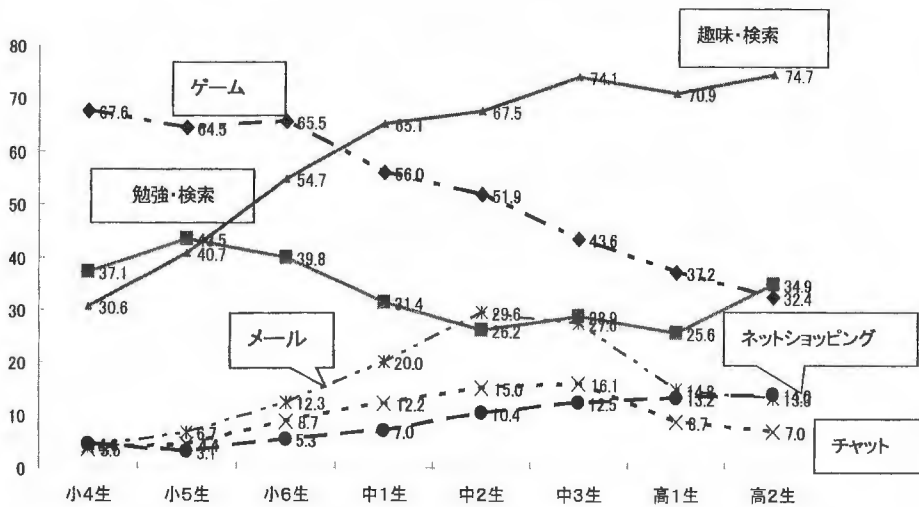
学校種別		使用頻度					合計
		週に5日以上	週に3~4日	週に1~2日	ほとんど使わない	家にはない	
高校	学校	452 18.1%	277 11.1%	607 24.3%	912 36.6%	227 9.1%	2494 100.0%
	トップ校	267 11.3%	248 10.5%	509 21.5%	902 38.2%	401 17.0%	2364 100.0%
	中堅校	86 9.5%	69 7.6%	150 16.5%	354 38.9%	238 26.2%	909 100.0%
	多様校	805 14.0%	594 10.3%	1266 22.0%	2168 37.6%	866 15.0%	5767 100.0%

【図表 6 高校偏差値層別のパソコン使用】

図表 5、図表 6をみて、明瞭に指摘できるのは、パソコンが「家にはない」ために利用できないという回答が、成績自己評価の下層や多様校の生徒に際立って多いことである。さらに高校段階になると、トップ校の生徒（男子が中心）がより一層使用していることもわかる。小・中学生でも成

績上・中位層に使用がやや多いといえよう。家庭の経済・文化資本に関連して、パソコンの使用が変化するといえそうな結果である。同様に、地域差もあり、大都市圏の子どもは郡部より使用頻度が高くなっていった。パソコン使用のインフラ環境が大きく影響しているとみられ、注目される結果である。

とはいえ、パソコンには娯楽や趣味から通信、勉強まで広い用途がある。パソコンを使用する層は、どのように活用しているのだろうか。図表7をみると、学校段階によって、かなりの違いがあることがわかる(ここでは、「絵を描く」「文章を書く」など11の利用法の選択肢から、特徴的な6種類を選択して示している)。



【図表7 パソコンの使用方法】

小学生では、「ゲーム機」として利用する割合が高く、テレビゲームの延長にあるといえるだろう。次いで、「勉強・検索」という回答が多い。また、中学生になると、「趣味・検索」で利用する者が多くなる。次いで、「ゲーム」の割合がしだいに下降しながら続き、携帯の代替としての「メール」機能が高くなっている。携帯ユーザーへの導入がなされていく過程とも読み取れる。さらに、高校生になると、「趣味・検索」が際立って高くなり、「勉強・検索」もやや持ち直す。個人の嗜好に合った利用が促進されるらしく、「ネットショッピング」も少しずつ増加する。

このようにみると、学校段階が上がるにつれて、パソコンは、ゲーム遊びや連絡のツールから、プライベートな世界(趣味的世界)を構成する手段へと位置づけが変わっていきと理解できる。こうした傾向は、パソコンを多く使用する者でも同様に見い出せる。

詳述しないが、パソコンの利用に関する認識の点でも、こうした傾向は裏付けられる。「パソコンをもっと使いこなせるようにしたい」といった技術的な理解は、どの学校段階でも共通に高い割合(7割から8割)をとる。その一方で、「パソコンで調べたことを親と話しをする」という回答は小学生に割合が高く(小34%>中19%>高13%)、「インターネットの使い方のマナーやルールを知っている」という回答は高校生に高くなっている(小38%<中51%<高55%)。学校段階があがるにつれて、個人の私事の世界をよりよく構成するメディアとして、パソコンが位置づけられていくといえよう。

7. 携帯利用者の特質

パソコンが、家庭のインフラ、あるいはそれに連なって、子どもの成績自己評価や偏差値層に規定されやすいとみられるならば、携帯電話はどうであろうか。すでにみたように、携帯には、性別・学校段階によって、さらには地域性によっても、その利用状況が異なるという特徴がある。この点は、さまざまな用途での携帯の利用方法や、携帯を利用した生活に対する評価の点でも確認できるのだろうか。

Q. 一日のうちで携帯電話をどのくらい使いますか。【1日に1回以上使う% (1~2回くらい) (3~9回くらい) (6~10回くらい) (11~20回くらい) (21回以上) の割合】						
	小学生全体 (N=801)	男子	女子	中学生全体 (N=2,081)	男子	女子
家族にける電話	62.9	55.6 << 68.5	45.8	46.5	45.2	47.8
家族に送るメール	42.2	31.3 << 50.8	46.1	41.8 << 49.4	48.4	40.8 << 56.6
友だちにける電話	36.3	31.3 < 40.3	38.3	41.5 > 35.7	33.2	36.8 > 28.9
友だちに送るメール	37.3	20.1 << 51.2	87.9	83.0 < 91.7	93.4	90.4 < 96.5
インターネット	21.5	19.5	23.0	47.6	44.3 < 50.2	54.2
高校生全体 (N=4,759)		男子	女子		男子	女子
家族にける電話	47.8	43.0 << 53.3		47.8	43.0 << 53.3	
家族に送るメール	48.4	40.8 << 56.6		48.4	40.8 << 56.6	
友だちにける電話	33.2	36.8 > 28.9		33.2	36.8 > 28.9	
友だちに送るメール	93.4	90.4 < 96.5		93.4	90.4 < 96.5	
インターネット	54.2	55.5	52.8	54.2	55.5	52.8

Q. 次のようなことはあてはまりますか。【「とてもそう」「まあそう」の%】						
	小学生全体 (N=801)	男子	女子	中学生全体 (N=2,081)	男子	女子
携帯電話を使うのが楽しい	66.9	54.8 << 76.4	84.3	76.4 << 90.3	80.8	74.3 << 87.9
携帯電話がないと今の生活が不便になると思う	56.5	49.7 << 61.9	76.8	69.8 << 82.0	82.1	79.9
何もすることがなくなる、すぐに携帯電話を見てしまう	37.4	28.8 << 44.4	60.2	50.2 << 67.9	60.2	51.8 << 65.9
電話やメールがないとさみしくなる	27.0	19.0 << 33.4	51.6	41.1 << 60.0	52.2	45.9 << 59.3
会ったことがない人と電話やメールでやりとりすることがある	8.1	7.9	8.3	21.3	15.9 << 25.2	23.4

【図表8 携帯電話の利用方法およびその意識】

図表8をみてみよう。まず、1日のうちで携帯電話を、ある利用目的で、「1回以上」は利用すると回答した人の割合を合計して示した(上表)。ここでも性差は大きい。どの学校段階でも「家族に

送るメール」は、女子が男子を大きく上回っている。特に、高校生では、帰宅時の配慮もあるためか、女子 56% に対して、男子は 40% にすぎない。同様に、「友達に送るメール」でも、女子がすべての学校段階で上回っており、高校生では、女子 96% > 男子 90% という回答率の差になっている。

さらに、携帯電話を利用する意識について尋ねると、ここでも性差は大きい(下表)。「携帯電話を使うのは楽しい」、「何もすることがなくなると、すぐに携帯電話を見てしまう」、「電話やメールがないときみしくなる」といった項目では、どの学校段階でも、女子の回答率がきわめて高くなっている。携帯電話の日常的な有用性(例えば、他者との関わりや暇つぶしのような効果)は、女子によって高く評価されやすいといえる。

では、携帯電話の利用意識は、パソコンのように、成績自己評価・高校偏差値層と関連しているといえるだろうか。図表 9 に、その結果を示した。ここでは、性別を統制したデータを示していないが、結果の傾向は男女とも類似している。

まず、すべての項目で両者に関連があるとはいえない。だが、「携帯電話がないと今の生活が不便になると思う」という利便性の項目では、小・中学校で成績上位層に評価が高くなる傾向がある。他方で、「何もすることがなくなると、すぐに携帯電話を見てしまう」、「会ったことがない人と電話やメールでやりとりすることがある」といった暇つぶしやメル友関係に関わる項目、いわば消極的でネガティブな携帯の利用意識についてみると、ここでは、成績下位層や多様校で割合がきわめて高くなる。

	小学校			中学校			高校		
	上	中	下	上	中	下	トップ校	中堅校	多様校
そう(とても+まあ) %	(227人)	(230人)	(263人)	(652人)	(761人)	(708人)	(2315人)	(1596人)	(858人)
携帯電話がないと今の生活が不便になると思う	61.7	50.4	54.8	77.9	77.5	75.2	82.8	82.2	80.4
携帯電話を使うのが楽しい	67.4	68.2	63.5	83.9	84.8	84.3	78.6	82.7	83.1
何もすることがなくなると、すぐに携帯電話を見てしまう	37.4	29.1	46.4	58.7	55.2	66.4	57.3	61.7	65.0
電話やメールがないときみしくなる	26.5	21.7	30.8	54.9	46.5	53.4	52.4	52.2	52.0
会ったことがない人と電話やメールでやりとりすることがある	8.8	5.2	10.6	18.9	18.3	26.0	19.5	26.0	29.6

【図表 9 成績自己評価・高校偏差値別にみた携帯電話の利用意識】

そこで、携帯電話の利用方法について、「友だちに送るメール」の回数という項目に絞って、性別および成績自己評価・偏差値層とのかかわりを見てみよう。対象を高校生に絞って見たのが図表 10 であり、小学生・中学生は図表 11 にその結果を示した。

これを見ると、先に仮説として提示していたように、高校生では 1 日に「21 回以上」メールを友達に送るといふヘビーユーザーは、多様校の女子 (37%)、中堅校の女子、多様校の男子 (ともに、31%) の順に割合が高くなっている。性差の影響がかなりあるとはいえ、偏差値層による違いも大きい。

同様に、「21 回以上」送るといふヘビーユーザーは、中学生の場合、女子の成績下位層で際立って高い割合であり、過半数を超えている (50.1%)。また、小学生でも、女子の成績下位層ではほぼ 5 人に 1 人 (18.3%) と割合が際立って高くなっている。同じ性別においても、成績差による効果がみとめられる結果である。

以上のことから、パソコンだけでなく、携帯電話の利用においても、友人との関係に関わる利用や消極的な利用意識などの側面では、性差ばかりでなく、成績による違いが強くみとめられるといえる。

学校種・性別	ほとんど使わない	回数					合計	
		1~2回くらい	3~5回くらい	6~10回くらい	11~20回くらい	21回以上		
高 男子 学校別	トップ校	114	213	289	235	146	175	1182
		9.6%	18.0%	24.5%	19.9%	12.4%	14.8%	100.0%
	中堅校	68	128	175	164	129	202	876
		7.8%	14.6%	20.0%	18.7%	14.7%	23.1%	100.0%
	多様校	30	33	74	89	71	139	441
	6.8%	7.5%	16.8%	20.2%	16.1%	31.5%	100.0%	
合計	212	374	538	488	346	516	2499	
	8.5%	15.0%	21.5%	19.5%	13.8%	20.6%	100.0%	
高 女子 学校別	トップ校	38	142	274	261	177	229	1126
		3.4%	12.6%	24.3%	23.2%	15.7%	20.3%	100.0%
	中堅校	19	63	112	150	141	225	714
		2.7%	8.8%	15.7%	21.0%	19.7%	31.5%	100.0%
	多様校	8	28	57	78	84	157	415
	1.9%	6.7%	13.7%	18.8%	20.2%	37.8%	100.0%	
合計	65	233	443	489	402	611	2255	
	2.9%	10.3%	19.6%	21.7%	17.8%	27.1%	100.0%	

【図表 10 高校偏差値層別にみた携帯電話の利用方法】

学校種・性別		成績自己評価別						合計
		ほとんど使わない	1~2回くらい	3~5回くらい	6~10回くらい	11~20回くらい	21回以上	
小学生男子	下	66 60.0%	8 7.3%	4 3.6%	3 2.7%	2 1.8%	3 2.7%	110 100.0%
	中	81 76.4%	7 6.6%	1 .9%	2 1.9%	1 .9%	1 .9%	106 100.0%
	上	70 68.0%	7 6.8%	3 2.9%	3 2.9%	1 1.0%	9 8.7%	103 100.0%
小学生女子	下	59 38.6%	11 7.2%	12 7.8%	22 14.4%	6 3.9%	28 18.3%	153 100.0%
	中	53 43.1%	13 10.6%	19 15.4%	12 9.8%	8 6.5%	12 9.8%	123 100.0%
	上	59 47.6%	16 12.9%	14 11.3%	9 7.3%	4 3.2%	14 11.3%	124 100.0%
中学生男子	下	48 16.8%	17 5.9%	29 10.1%	48 16.8%	30 10.5%	104 36.4%	286 100.0%
	中	37 13.3%	24 8.6%	31 11.2%	38 13.7%	38 13.7%	100 36.0%	278 100.0%
	上	37 12.0%	29 9.4%	52 16.9%	38 12.3%	51 16.6%	94 30.5%	308 100.0%
中学生女子	下	25 6.0%	20 4.8%	44 10.6%	44 10.6%	65 15.6%	209 50.1%	417 100.0%
	中	21 5.4%	24 6.2%	50 12.9%	82 21.1%	70 18.0%	132 34.0%	388 100.0%
	上	21 6.2%	28 8.2%	48 14.1%	79 23.2%	50 14.7%	109 32.0%	341 100.0%

【図表 11 成績自己評価別にみた携帯電話の利用方法】

8. まとめ

以上、『子ども生活実態基本調査』の結果から、メディア世界と子どものかかわりをみてきた。その知見を4点にまとめておこう。

a. テレビのような「一般的メディア」に比して、他のメディアは、一定の属性を持つ層によって、限定的に使用されやすい。

例えば、テレビゲームは小学生男子の多利用メディア。また、携帯電話は、高校生の女子の多利用メディア。このように、性と学校段階によって、友人関係の変容などもあるためか、メディア使用の限定が起こりやすいとみられる。パソコンは、使用目的が趣味的になるという限りにおいては、高校生男子の多利用メディアであるといえよう。

b. 家庭でのパソコン使用は、学校での使用状況と直接連動しない。また、家庭でのパソコン多利用ユーザーと携帯の多利用ユーザーとは、属性からみると異なっている。

例えば、高校生は学校学習でパソコンを利用しやすいが、家庭では小学生と同程度の利用状況にすぎない(使用する内容は異なる)。また、高校生男子はパソコン、高校生女子は携帯というメディ

ア使用の相違が明瞭であるといえる。

c. 家庭でのパソコン使用でも、また携帯使用でも、成績別によって子どもの使用に差異がみとめられる。

パソコンの場合、高校生では高い偏差値層で利用が多くなりやすい。一方、携帯利用は、低い偏差値層で特徴的な使用傾向(暇つぶし利用やメル友指向など)があるといえる。学校段階や性差といった属性だけでなく、勉学に関わるポジションも、友人関係や生徒文化などの違いを招くためか、メディア接触を変化させると推察できる。

d. 家庭でのパソコン設置状況は、成績上位層や偏差値層で充実しており、インフラ基盤の差が成績層と関連しているとみられる。

パソコンなどの情報機器の設置状況が、家庭の経済・文化資本と関連しているとみられる結果である。携帯電話では、このようなインフラ条件はみとめにくい。

このように、第1に、メディア単独でなくメディア相互の子どもに対するエコロジカルな影響に注目していくと、学校段階ごとに利用メディアの相違がわかる。第2に、学年・学校段階が上昇し、学校・家庭・通学区域など利用の場が拡大することに応じて、接触するメディア自体も変化することがわかる。第3に、家庭などでの機器のインフラが、メディア接触を変化させる可能性があることもわかる。このようにメディア接触に関して着眼すべきいくつかの点が理解できたといえる。

このようにみると、メディア否定論も肯定論もいずれも、多メディア時代の子ども世界の実情を十分踏まえてはおらず、その特定の側面にのみスポットを当てた議論をしているといえる。むしろ学年やジェンダー、成績、地域性などの複合的な属性が、さまざまなメディアを選択させる条件を生み出していることに着目して、議論を展開する必要がある。

そうでなければ、メディアと子どもの言説は、まさに幻想にとどまり、単なる悲観や楽観を生み出す装置にすぎないかねない。現状では、メディアの中の「子ども問題」は、さらに実証的な資料から吟味されるべき多くの課題を含んでいるといえる。今後、一層、実証的な分析に取り組んでいきたいと思っている。

(こが まさよし 中央大学文学部)